



# ひらほく新聞

ひらほく新聞で検索!

★ホームページ・ひらほくランド★

http://www.hirahoku.com/

☆バックナンバー含め ひらほく新聞を  
閲覧・ダウンロード可能です!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



自分の両親、その二人の両親...と十代先祖をさかのぼると、その人数は何人でしょうか。二十代、三十代では? 毎年有難く受け入れている地元神田中学校2年生の職場体験の際に、そんな命に関するお話を必ずさせてください。有難くいただいている、お預かりしている、この「いのち」。重いテーマに感じるかもしれませんが、大切な思いを共有していただけたらと思います。

未年の新年一月、皆さんはどんな思いでスタート、過ごされましたか。初詣に出かけ、感謝を伝え、今年の目標、願いをお願いした方も多いと思います。しかし、年頭にしっかりと立てたはずの目標がいつのまにか薄れたり、叶えてくれないと諦めてしまうという方も多いのではないのでしょうか。日々、忘れずに思い続けるには自らの努力、習慣づくりしかありません。

まずは、そんなふうに見える、願えるこの「いのち」のある幸せ、そして日本に生まれ、こんなにも平和な社会に暮らす何不自由のない目の前の生活が、決して当たり前ではないということを確認しなければなりません。

県央地区、座間市の成人式は、毎年何らかの理由で20歳になる前に亡くなられた方々に対して捧げる黙祷から始まるそうです。若くして亡くなる命に関して、昨年末の講演会で千ちゃんこと、千田利幸さんから以下のような感動的なお話を拝聴しました。

出生の瞬間、お母さんは世界中で年間に50万人も亡くなっている。日本は医療技術がとてつもないので、この現実を達している。赤ん坊は生まれてすぐは何もできないが、近年日本では少子化で1人か2人なので両親も手厚く過保護に育てている。諸説あるが、江戸時代前期、生まれた時の平均寿命は15歳、20歳くらい、そして、15歳まで生きた人がその時点からの平均寿命は50歳くらいという研究結果がある。

背負っていく覚悟、15歳まで生きることができた人間としての覚悟をするための儀式。世界を見れば、貧困な地域では現在でも15歳まで生きられない子どもたちがたくさんいる。やろうと思えばどんなことでも挑戦できる日本に生まれた幸せ。スポーツ、勉強、物づくり、いろんなことを表現できる自由がある。やりたいうことを表現できずにこの世を去った人が山ほどいる。

「今ここを生きて」とは、自分の生き方を変えること。生かされなかったすぎまじい魂たちが皆を後押ししている。私たちは全部繋がっている。今ここをどう生きるかが地球の裏側まで影響する。本気で「今ここを生きて」こと。

とても胸に深く響くお話でした。その昔は、本当に生き抜くということが難しく、命を落とさずに年をとるという意味で、お正月が「おめでと」の誕生日だったといいますが、思えば、新潟の田舎にいた頃、「年とり」といつて大晦日の夕方に神棚と仏壇に向かって家族揃って手を合わせ、おせちを有難くいただきました。命の意味をこれでもかと強烈に伝えてくれた出来事、東日本大震災からもうすぐ丸4年。決して忘れてはいけません。出て来ますが、いつも思い起こして手を合わせていますか。どこか思いが薄れている時がありませんか。

## 奇跡的な命の繋がり

自分の両親、その二人の両親...と十代先祖をさかのぼると、その人数は1024人、二十代104万人、二十代で約1億人、三十代で10億人を越え、平安時代中頃に兆を越える計算だということ。二十代あたりの日本人中どこか、この世界人類が皆繋がっているということ。

遠い遠い昔、宇宙から連綿と繋がって引き継がれてきたこの自らの命に思いを馳せてみましょう。有難く想像するとき、最も奇跡的に思えるのは、もしも何十何代目かの誰か一人が亡くなっていたら、この自分の命が存在していないということ。

「今を生きている」という意味、この奇跡的な命の繋がりが、ぜひ大切に受け取って、未来へ向けて目の前の一日を全力で繋いでいきましょう。以前、ひすいこたろうさんの著書「あした死ぬかもよ?」をご紹介します。あの世には、お金も家具も服も家も持っていくことはできません。だから、最大の不幸は、財産を失うことではなく、死ぬ前に「もつと冒険しておけばよかった」と後悔することです。この世界は煩惱だらけ。自分の幸せだけ考え、好き勝手にただ何となく生きていたら、後悔どころか、まともな「あの世」へも逝けないのではないのでしょうか。どうせなら、大切な思いが繋がった「あの世」へ逝けるように日々精進していきましょう。(自分の言い聞かせです!)

## かけがえのない命

何度かご紹介してきました、心から崇拝する博多の歴史女こと白駒妃登美さんのフェイスブックでの投稿をご紹介します。

佐賀県の小学5年生の道徳の授業で、「かけがえのない命」というテーマでお話しさせていただきました。最後は、拙著「ここに残る現代史」(KADOKAWA)にも掲載させていただいた、ある特攻隊員の遺書を子どもたちに聞いてもらいました。ちょっと難しかったかもしれないけれど、原文のまま、心で聞いてもらいました。

「あとに続く生き残った青年が、戦争のない、平和で豊かな文化国家を再建してくれることを信じて、茂はたくましく死んでいきます」

私がどうしても伝えたかったのは、この一文です。茂さんは、日本人の誇りを、自分の命にかえてでも守りたかったんだってことを、子どもたちに伝えたかった。戦後教育は、子どもたちに「命が一番大切」と教えてきました。でもその結果、命がなくて軽くなってしまったのでしよう。自分の命を絶つたり、相手の命を簡単に奪つたり。人は、「命を懸けて守りたいもの」を持つから、命を大切にできるんだと思います。大切な存在を、命を懸けて守ると覚悟を決めれば、どうでもいいことのために死ねないと思えます。

「ていきます」と宣言してくれました。子どもたちの美しい感性に、感動と希望で胸がいっぱいになった一日でした。

以前、知覧の特攻平和会館を訪れた時に拝読した、若き特攻隊員たちの数々の遺書たち。多くは小さい頃面倒をかけた親孝行でできなかったことのお詫びと、「今からお国のために立派に征きます」との宣言の内容でした。とても涙なしに見ることはできませんでした。

館内のボランティアさんのお話も、とても心に残りました。戦争経験者であろうご年配の方は、生き残った者として伝え残す使命感からか、修学旅行の生徒達にしっかりと事実を語っていました。特攻に旅立つ若者は二度覚悟をしたそうです。一度目は、戦闘機に乗り込む際に最後に地面から足を離した時。そして、もう一度は飛び立ってから後ろを振り返った時、最初は形の良い「開間岳」が綺麗に見えるのですが、ついに見えなくなりました。その時に「もう二度と日本には帰れない」と覚悟をしたのだそうです。平和ボケしている今の私たちが、「誰かのために」果たしてそれだけの覚悟ができるのでしょうか。

「永遠の0」の伝えたかった思い。「大切な人のために生きたい」。複雑な葛藤をかかえたまま征つた命もあつたのでしよう。とても想像できない次元の世界です。戦後70年、戦争経験者の語り部がさらに少なくなっていくなか、子どもたちに何度でも伝える、知つてもらおう機会を多くつくっていかねければと実感します。

